

基調講演

「持続可能な社会を目指して 未来の子ども達のために SDGs」



- ・日 時：令和4年6月24日（金）
- ・場 所：名古屋国際会議場1号館4階
（141・142）
- ・参加者：65名 & YouTube ライブ配信
- ・講 師：百瀬 則子氏

◆講師プロフィール

1980年ユニー（株）入社。以降、環境部長、執行役員、さらに国の各種委員を務められ、2019年（一社）中部SDGs推進センター副代表理事就任。2020年ワタミ（株）執行役員、SDGs推進本部長に就任し現在に至る。

- Contents

1. SDGsの生まれた背景
2. SDGsの目標：日本の達成度
3. 現時点で世界が重要としているSDGs課題
4. プラスチック問題
5. 食品リサイクルは命をつなぐ環
6. 持続可能なファッション
7. 2030年の課題・・・高齢化社会とD&I
8. 自社のパーパス 一人一人のSDGs

講演冒頭に百瀬講師が持続可能な社会を目指していたワタミ（株）と関わられた経緯や中部地域にSDGsを根付かせるため、（一社）中部SDGs推進センターにおける活動を始めたことについてお話がありました。ちょうどその頃、2020年東京オリンピックは持続可能なSDGsオリンピックになるであろうと思われたこと。また、愛知万博は環境万博であったことから、2025年の大阪万博でもSDGs万博にされたいとのことですが、地域ではまだSDGsへの認識が浸透していないため、多くの方に知っていただくことを目的として、SDGsの普及啓発活動をされているとのことでした。



講演をする百瀬講師

また、本講演でお話しするSDGsの内容は、ごく普通に意識してできることが多いと百瀬講師は述べられ、今日からでも社員の皆さんに話して欲しいこととして、SDGsとはとても普通のことであり、今やっておかないとこれから先の子ども達にも当然影響があります。

今私たちは普通に空気を吸って、お水を飲んで、海で泳ぎ、食事もいろいろ選ぶことができますが、何年後はこういう世界に生きられないかもしれない危機感を伝えて欲しい。次の世代のために是非SDGsに関心を持ち、仕事の中で生活の中で、次の世代のために少し配慮して100年先に向けて道標としてSDGsを実践していただければ、とのことでした。

1.については、2015年のパリ協定は地球温暖化防止という環境の問題に対して交わされました。同時期に国連で作られたSDGsは環境だけではなく社会や経済や特に人間の問題がたくさん含まれています。気候危機による8つ（1-海面上昇、2-洪水、3-台風など、4-熱波、5-食料不足、6-水不足、7-海の生態系の損失、8-陸の生態系の損失）の主要リスクについて身近な例で説明があり、「誰一人取り残さない」というSDGsの精神と17のゴールについて解説しました。

2.では、日本の2022年のSDGs達成度は19位であり、前年の18位より一つランクダウンしており、これは以前からの課題である電子機器の廃棄量が多く、プラスチックごみの輸出量が多いことが評価を下げている、とのこと。

3.では、SDGsの課題として国際紛争が起きていること、気候危機のリスクと社会の大転換、新型コロナウイルスとライフスタイルの変化、エシカル消費（人や社会・環境に配慮した消費行動）、人材の多様性を認め活かすこと（ダイバーシティ&インクルージョン）等を挙げました。

4.では、2022年4月に施行された「プラスチックに係る資源循環の促進等に関する法律」について、コンビニのスプーンやフォーク、ホテルの歯ブラシ、クリーニングのハンガー等、使い捨てプラスチック製品12品目が規制の対象となり、廃棄プラスチックは気候変動・海洋プラスチック汚染の原因となっている。日本のリサイクル率は19.6%でありOECD加盟34カ国中最低であり、焼却率は77%であるとのこと。（SDGs 14海の豊かさ）

5.では、日本における食用仕向量（生産・製造・輸入されている食料）は1年間で8,088万トン。食品由来の廃棄物量はその34.1%になっている。（平成28年）スーパーから排出される未利用食品は非可食残渣（青果の調理くず、魚のアラ、精肉くず等、惣菜製造等の廃食用油、飲食店等の食べ残り）と製品廃棄（生鮮食品、工場製品の商品の売れ残り）に分けられ、これまでは事業系一般廃棄物として適正に処分されていましたが、事例では未利用食品を再資源化するため、堆肥や飼料に資源化、それを使い生産した農畜産物をまた販売する資源循環農業への取り組みを紹介しました。食品関連事業者・再生利用事業者・農業生産者がそれぞれの役割を果たすことによりリサイクルの環が完成し、回り続けることができる。（SDGs 12.3食品ロス削減 12.5廃棄物削減）

6.は、衣類生産には多くの水とCO₂が排出されるため、アパレル産業は「世界第2位の環境汚染産業」としてUNCTAD（国連貿易開発会議）に指定されているので、環境負荷低減には“捨てないこと”、“資源化”することも解決方法であるとのこと。（SDGs 12.5廃棄物削減）

7.では、8年後の2030年はSDGsの最終年、次の2050年につながるマイルストーン（中

間目標）であるため、SDGs達成に向けて世界が真剣に取り組んでいます。また、高齢化社会では2021年の日本の高齢化率は29.1%ですが、2025年では30.0%、高齢者の5人に1人が認知症、2030年では100歳人口が19万人と予想されています。これからの超高齢化社会と人口減少により介護社会が拡大するため、SDGsが未達成であった場合、地球温暖化による気候危機で健康問題、食料問題が甚大となり、さらにAI化により多くの職種で仕事を失うと考えられています。そのため、「ダイバーシティ&インクルージョン」により誰にでも生きやすい社会の構築は介護が必要な高齢者のみならず、障がい者にも向けたバリアフリーの誰にでもやさしい暮らしやすい社会の構築が「誰一人とり残さない」というSDGsの理念そのものです。（SDGs 2食料問題 3健康 11住み続けられるまちづくり 13気候変動）

8.は、自社又は一人ひとりがどんなことができるか、自社のパーパス、一人ひとりのSDGsです。みんなの未来を考えてエコ商品・リサイクル商品を購入、食品ロス削減等、自分の周りの地域や世界を考えてフェアトレード商品、寄付付き商品、被災地産品、オーガニック商品等の購入、みんなに優しい社会に向けてのユニバーサルデザイン、ダイバーシティ等を提案しており、これを会社の中でもやってほしい。いまの持続可能性という取り組みは、マイナスの側面を減らす（CO₂削減、プラスチックによる海洋汚染への対応等）ということであって、プラスの側面を増やすということとはイコールではないとのこと。2030年にありたい姿を実現するには、自社の利益や効率化等だけではなく、社会や地域の人たちのためになることを含めて考え、2030・2050年の理想の社会を想像し、その時に自社のあるべき姿になるための逆算をして、2022年に体制を整えることを提案し、世代を超えて、全ての人が自分らしくよく生きられるを実現した社会は、100年後の子ども達、私たちの孫を含めた子孫が幸せに暮らせるためでもあるとのことでした。

現在SDGsの文字を目にしなない日はありませんが、協会員全てが取り組むことにより業界のゴール達成が近くなるのでは、と背中を少し押されたような実り多き講演でした。